ARCHITECT

NO.320

2015. 5. MAY.

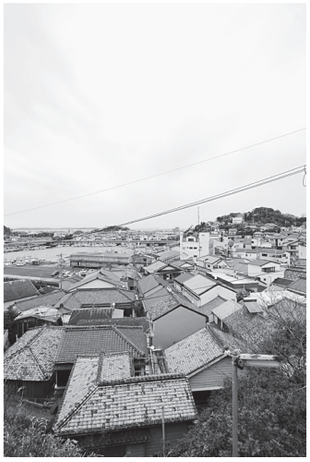
CONTENTS

自作自演189 …… 鈴木幸治・青山仁志・伊井　伸・豊田由紀美 …… 2
＜対談 第3回＞建築を囲む科学　後編　生源寺眞一氏に聞く …… 4
「JIA正会員」は全員「登録建築家」に　建築家資格制度について考える＜私の意見＞
車戸慎夫・高嶋繁男 …… 6
特集・連続企画　地域社会と建築をつなぐもの 3
プロポーザルの仕組みづくり② 豊田市の事例について …… 佐々木勝敏 …… 7
JIA静岡発　建築ウォッチング 沼津御用邸記念公園を訪ねて …… 亀井暁子 …… 8
JIA愛知発　研修見学会「穂の国とよはし芸術劇場PLAT」 …… 伊藤彰彦 …… 9
JIA岐阜発　会員研修会 自然との闘い 浜岡原子力発電所を訪ねて… 西川光広・寺下 浩 ほか …… 10
Bulletin Board …… 11
「JIA東海支部大会2015」に向けて …… 浅井裕雄 …… 11
2014年度「日本建築家協会優秀建築選100作品」入選された東海支部の皆さん …… 12
伊藤恭行・栗原健太郎 岩月美穂・佐々木勝敏
川本敦史 川本まゆみ・小谷陽次郎・浅井裕雄
2014年度リフレッシュセミナー 参加レポート … 寺下 浩・関口啓介・森本雅史・川口亜稀子 …… 14
会員のステージ
報告：愛知県春日井市ことぶき町公民館プロジェクト …… 高橋敏郎・川口亜稀子 …… 16
▶東北からのメッセージ
木に向ける視線と森に向ける視線② …… 久野紀光 …… 18
▶東海の減災を考える　名古屋大学減災連携研究センターからの提言
防災・減災情報の可視化により災害イメージを喚起し備えを推進 …… 倉田和己 …… 19
保存情報　第162回　JR高山駅 …… 中澤賢一 …… 20
後藤邸 …… 三井富雄 …… 20
理事会レポート …… 石田　壽 …… 21
東海支部役員会報告 …… 奥野美樹 …… 22
東海とっておきガイド㊽三重編 …… 木下誠一 …… 23
地域会だより …… 23
法人協力会通信⑰　TOTO㈱津営業所 …… 小森　聡 …… 24
編集後記 …… 牧ヒデアキ・宇野　享 …… 24

東海の集落 2

篠島（愛知県南知多町）。知多半島の先端、師崎の南東約3kmに位置する離島である。面積約0・94㎢、1700人ほど（2010年）が暮らす。江戸時代には尾張藩の流刑の地だったとある。

1974～77年には篠島本島と北にある中手島、小磯島が埋め立てにより陸続きになり、整然とした住宅地として整備された。一方、島中央部は超過密地帯である。幅1・55mほどの路地を挟み、両側に家屋が密集して軒を連ねている。軒下には自転車、バイク、鉢、洗濯物のほか、生活雑貨なども置かれ、きわめて混沌とした風景である。路地を歩くと少し開けられた窓から家の内部が覗かれ、テレビの音が聞こえてくる一方、ところどころ空き家と思われる家屋も散在している。漁業の街は概して過密で、農業や商業で成り立った街とはまったく違う成り立ちをしている。想像するに、仕事場である港が近いことが交通手段の乏しい当時は最優先されたのだろうか。磯の香り漂う漁業と観光の島は今、人口減少、高齢化、観光不振の問題に直面している。


港から島中央部を望む

生津康広
生津建築設計室アーキハウス

05_アーキテクト.indd　1　15.4.20　4:34:37 PM

自作自演189

鈴木　幸治（JIA静岡）

ナウハウス（浜松市南区頭陀寺町330-20　TEL 053-461-3408　FAX 053-461-3428）

白梅のミステリー

ナウハウスの中庭に還暦を過ぎた白梅がある。今年はことに見事に咲いた。7年前、亡くなった父が「たくさん生（な）ったなあ」と呟くほど実がついた。「蛇がいる」と突然父が言った。凝視するが蛇などいない。そもそもこんな街中にいるはずがない。枝が蛇に見えたのだとそれ以上気に留めなかった。

ところが蛇が出たのである。昨年６月のサンルーム工事中、水盤のメダカを覗いていたときである。違和感がして見上げると、異形なものが梅の枝にからみ体を強ばらせている。黙って指差すと家人はのけぞった。1.3mくらいのシマヘビ。なぜ、どうやってと頭が錯綜した。

庭にある白テーブルの石皿は雀の餌場である。もしや枝にとまる雀を狙ったのか。確かに雀は大騒ぎであった。その日は放置したが翌日も動く気配はない。そういえば一昨日、玄関先で大きな蛇がクルマに轢かれていた。「気の毒に、なぜ？」と思ったが、まさか庭にもう１匹いるとは思わない。あの2匹はつがいだったのか。不幸にして１匹は轢かれ、他方は雀を待ち伏せしている。命がけの狩りだから簡単に去るわけもない。

蛇は縁起がいいものとされているが放置しておくわけにもいかない。数人がかりで胴を突き首を引いた。よほど腹を空かせているのか痩せぎすの体がちぎれそうであった。やっと二重袋に入れ、国道を越え300m先の川に放した。遠くの雀がどうして分かるのか謎のままである。かつて父が見たのは本当に蛇だったのかもしれない。

青山　仁志（JIA愛知）

青山設計 Archi design desk（名古屋市千種区内山3-7-11-2　TEL/FAX 052-733-7278）

最近思うこと「やっぱりプロセス重視」

2012年に組織設計事務所を退社し、建築設計+webデザイン事務所を立ち上げました。30年以上組織にいたので、どうなるものかと本人も興味津々のなか、それでも「すべてのプロセスをすべて自分でやろう」と思い、事務所のハードづくりは本業の設計で当然自前、設計ネットワーク、営業ネットワークづくりを経て法人登記も自分で行い、仕事のオファーもあり1年ほどで事務所を設立しました。

長年プロポばかりやってきたせいか、結果は良くも悪しくも（不本意でも）淡々と受け入れ、その分プロセスをいかに楽しむかに全力を注ぐという感覚は、独立してからも消えず、むしろ、「建築設計とはプロセスに内包化された建築家の輝く発想の集大成である」とか、「傍からは結果しか見えないところが、プロセス・メイキング本が売れる理由だけど、本人にしか分からないのがプロセスの面白さだ」とか、「もともと永遠が約束されていない社会と生命の中で、『結果だけが重要』とする最近の傾向は、根本から間違えている」とか訳の分からないことを唱えながらプロセスを重視した姿勢で業務を進めています。

改めて周りを見渡せば、「実績（＝結果）がなければ参加もできない」ことや、「実績（＝結果）があれば内容は問わない」ことやあれや。新しく開設した事務所に実績での門前払いはつらいものがあるが、「プロセス重視」を標榜した以上、泣き言は言えない。そんな設計方針を支えるのは、いかにプロセスにかける時間を多くできるかで、結局のところ、お約束の「知恵より体力」というオチでした。

05_アーキテクト.indd 2　15.4.20 4:34:37 PM

伊井　伸（JIA愛知）

都市造形研究所（名古屋市中区丸の内3-6-27　EBSビル8F　TEL 052-972-6831　FAX 052-972-6832）

海外旅行で感ずること

過去７年間ぐらいの間に東南アジア、特に中国（上海・大連）、タイ（チェンマイ）、ベトナム（ムンバイ）を旅する機会に恵まれた。特にタイでは大規模工場設計に携わり、さまざまな国情・風習・地域特性を目の当たりにすることができた。また約30年前から何回かヨーロッパを旅することがあるが、ヨーロッパの歴史的建築や古い街並を視察した体験と今回の東南アジアを巡る旅に何か大きな違いを感じてならない。

理由はいくつか考えられる。その国々の社会情勢の変化、経済発展の状況、それ以前に自分自身の経験・立場などの変化によっても大きく変わってくる。歴史的建造物・歴史的街なみの価値は大きく変わるものではないが、それに対する興味は大きく異なってきている。なぜだろう？　例えば経済発展著しい上海では、われわれ日本人の立ち位置さえもなくなりつつある気がする。片や現在のタイ（チェンマイ）では日本人大歓迎であり、自分の技術、経験をはじめ、立ち位置が明確となる。ベトナム（ムンバイ）に行けばまだこれからの国という位置づけから、何から始めようかと別の意識に苛まれる。しかしなぜイタリアを初めて旅したあの感動と東南アジアの旅の印象は大きく異なるのだろう。私がヨーロッパの街並に興味があるからなのか。またアフリカを旅した印象も東南アジアの旅とは大きく異なっていた。それだけでは表せない何か違った答えがある気がする。

そのためにも、今まで旅した国々をもう一度同じ目的で旅し、その違いを発見することも必要な気がしている。海外からの情報はわれわれの周りにはあふれるほどにあるが、自分の立ち位置を明確にして見る習慣を持つことも大切である。

豊田　由紀美（JIA三重）

Y’s建築設計事務所 (鈴鹿市神戸2-9-63　TEL 059-367-7305　FAX 059-367-7306）

言うは易し、行うは難し

1964年の東京オリンピックの前に建設された「ホテル・オークラ本館」が、2020年の東京オリンピックを見据えて建て替えのための取り壊しが決まったと少し前に報道で知った。

宿泊者には歴代の各国要人や世界中の有名人が多数おり、各界から取り壊し反対の声が上がっているという。日本の「取り壊し」文化の犠牲者とまで言われているらしい。

実は私は、宿泊したことは一度だけで、あとはホテルで開催されたシンポジウムなどの折に訪れたくらいなので、どのくらい文化的・歴史的な価値があるのかよく知らず恥ずかしいのだが、海外からの高い評価と取り壊しを惜しむ声に比べて、なぜ国内からの反対運動が起きないのかという疑問については、少し理解できる気がする。

ネットの言葉を借りれば、ホテル・オークラ、特に本館ロビーは「日本の美とモダニズムデザインが独特に融合」しており、「東京の顔」、「唯一無二の建物」であると称賛されている。しかし、築後50年が経過しているため現在の耐震基準を満たしてはおらず、また低層であるため経営的には不利なのだそうだ。鉄筋コンクリート造の寿命については欧米に比べて短いとの指摘もある一方、文化・伝統と経済効果を秤にかけるなとの批判もあるようだが、利用者の安全と敷地の有効利用を考えればやむを得ない決断であったとも思える。今回は海外からの声に動かされた感があるが、今までは無関心だったのに、他人が惜しむと「我も我も」とあやふやな正義感を楯に取り壊し反対の声を上げるのは軽率ではないかとも思う。すでに建て替えに向けて進行中の大プロジェクトを白紙に戻すのは容易ではない。まさに「言うは易し、行うは難し」。

05_アーキテクト.indd　3　　15.4.20　4:34:37 PM

〈対談 第 3 回〉建築を囲む科学　後編

この連載は非建築の研究者と建築の研究者が「建築」をキーワードにして対話でつながるものです。このつながりが会員建築家や他の研究者にも広がり、東海独自の建築や研究活動が出来上がっていくキッカケになることを望みます。

第3回は『農業がわかると、社会のしくみが見えてくる　高校生からの食と農の経済学入門』(2010年、家の光協会)などの著作がある生源寺眞一氏（名古屋大学生命農学研究科教授）です。聞き手はブリテン委員の伊藤恭行氏（名古屋市立大学教授）です。

吉元　学｜ワーク○キューブ

伊藤　東日本大震災以降、エネルギーを消費しない建築を目指すべきということが自覚されるようになっています。農業でも施設園芸に重油を使うこととか、海外から輸入するなどのことについて考えられていることはありますでしょうか。

生源寺　資源そのものについては先細りであることは間違いないですね。フードマイレージ、もともと英語ではフードマイルズといいまして、輸送距離×食物の量で輸送過程の環境負荷に着目した議論なのですが、多分日本は一人当たりの値が世界で一番大きい。そのことをもっときちんと伝える必要があるだろうと思うのです。社会の、あるいは人の生き方としてどうなのか、常軌を逸していないか、と感じることもあります。

伊藤　建築の世界でも、例えば住宅を買う人が、食物のトレーサビリティと同じで、いろいろな問題を考えるようになってきています。高断熱化などは一定以上のコストかかるわけですが、それも理解したうえで、環境的にも自分たちの生活にとっても良い意味があるのだと。それが多くの人に共有されれば、随分と変わってくる可能性があるかなと感じています。

生源寺　建築でも食べ物でも経済を考えたとき、その目的は良いものをたくさんつくって儲ける、それで成長することなのですが、できたものをじっくり味わうというか、良い形で長く使っていくことも経済活動ですよね。生産だけが経済成長となると、極端な話、早く無駄づかいして次のものを買うほうが良いことになります。そうではなく、同じものを倍の期間使えば倍の価値となる、と考えればいいのですよね。できたものを良い形で使ったり味わったりするということが実は経済生活の半分、ひょっとすると、そちらのほうが本来メインであるべきかもしれません。そういう意味で建物の世界は羨ましいと感じます。

伊藤　現実ではなかなかうまくいきません。持続可能、サスティナビリティということは、今の時代、文明論的問題ですね。

生源寺　サスティナビリティについては、1987年に国連に設置されたブルントラント委員会の、少なくともわれわれが引き継いだものと同じものを次の世代にという概念が非常に大事です。サスティナビリティという言葉は体のいい形容詞としてよく使われていまが、本来、このままいくと次の世代のものを先食いしてしまう、という厳しい警鐘なのです。その定義のところへ戻る必要がありますね。

コミュニケーションの大事さ

伊藤　私自身、自分の設計事務所を持っていて若い人たちに働いてもらっていますが、彼らがキャリアアップしていく道筋が何となく見えていないのでは、と思います。頑張れば到達できるというキャリアアップの道筋と、ロールモデルになるようなことがあればいいのですが。

生源寺　それとメンター的な人ですね。農業関係でいうと、一時中断しながらも戦前から70年以上続いている中日農業賞というものがあり、私は審査員長を10年ほど務めているのですが、この賞のいいところは受賞の対象者が40歳以下ということ。青年農業者を顕彰するのです。東海・北陸9県が対象で、遠い存在ではなく、毎年の各県の代表農家は気軽に話を聞きにいけるぐらいな感じで、ロールモデル兼メンターにもなりうると思います。

若くて成長している農業者を見ていると、人とのつながりがものすごく上手です。販売の情報発信とか、消費者の動向把握とか、要するにきちんと人に向き合う人間でないと、なかなかしっかりした農業経営ができない時代になっている。

伊藤　その話は設計事務所ととても似ています。設計者もデザインだけうまくてもだめで、発注者とコミュニケーションができないといけません。

生源寺　若い人材育成ということでは研究室にこもって多くの本を読むことも大事ですが、現場で起きている問題の解決を図るプロセスで学んでいくことも重要だと思います。現場と大学、あるいは研究機関とのつながりのあり方は考えていかないといけません。地域おこし協力隊などを通じて若い人が田舎に定着する動きも出てきていますが、日本全国の集落の数からいったらまだ足りない。そういった頑張ろうという人を育てる、支えていくことも必要なのだろうと思います。

05_アーキテクト.indd　4　　15.4.20　4:34:37 PM

文化としての農業・建築

生源寺　実は米づくりだと10ａ当たりの年間投入時間は平均で30時間以下なのです。ハウス、施設園芸だと品目にもよりますが1,500から2,000時間ほどかかります。稲作は極度に省力化されており、農作業的には苗の準備、田植え機で田植え、コンバインで刈り取り、それだけです。けれども、日本の優れた水田経営は、働いている人の密度が高い。豊田市のある生産法人は水田400haを持っており、日本のトップクラスですが、常勤の職員が30人ほど、パートもかなりいます。アメリカだと平均200haで2～3人のオペレーションです。その法人は稲作だけではなくて、空いていれば野菜をつくったり、農産物の加工や直売所もやったり、いろいろな仕事を組み合わせています。これは日本の農業の特徴ですね。

7～8年前、東大で農学部長をしていたとき、オーストラリアの農業者の方が学部長室に来られたことがありました。彼らは日本の農村を結構回っていて「日本の農村は生産を大事なことと考えているけれど、文化的な要素も非常に強いことがよく分かった」と言っていた。そしてあっさり「オーストラリアの農業は違う、われわれはビジネスだ」と。ある意味感心しましたね。

生源寺ゼミのメンバーで稲刈り（2007年、長野県飯山市にて）

吉元　今、自分の家を地元の木でつくろうという人たちがいて、山で木を切る場にも立ち会って感激されています。でも広い目でみるとそれはほんの一部で、一方では木は単なる材料であり文化として扱われない現状がある。「木や森を文化として考えた家づくり」と日本の建設経済とどうマッチングさせていくのか…と考えています。

生源寺　大学によって違いますが、東大や名古屋大学では農学部のなかに森林関連や材料科学の学科があります。森や木材の分野とのつながりがあるのです。その縁も多少あって、私は認定NPO法人樹恩ネットワークの会長を数年前から仰せつかっています。「樹恩」とは、西岡常一棟梁の著書にある言葉です。間伐材で割り箸をつくる活動や、若い人の森林での作業体験などを行っています。阪神淡路大震災のとき神戸の学生寮が壊れ、徳島県の林業関係の方々から材が提供されてミニハウスができ、そのつながりで生まれたネットワークなのです。どちらかという若い人を支えることを中心にと考えています。

伊藤　木材に関しては、105角のものなどは流通材であるのですが、大規模に木を使おうとすると山から木が集まらないことがあります。鉄とかコンクリートなどの工業製品的な材料だと予算も計算できるのですが、木は非常に神経を使います。でも傷がついたらそれが味わいになるなど、郷愁というのでもない、実際的な意味での自然の持つ面白さがありますね。最後にひとことお願いします。

生源寺　気になるのは、日本社会の食生活が生命維持装置の中にいるようだということです。生き物ですから戦って食べ物を得るということが本能的にあるはずなのですが、それが遮断されていると感じることがあります。学生には毎年田植えなどの体験をさせたりしますが、実際に牛にさわってみたりなど、自分も生き物なのだから、生き物と接して生命の真髄に触れる体験をしてほしいですね。

また、農業に理解あるいは関心ある人の層を増やすことが大事だと思います。職業として農業をやる人が増えるのはもちろんですが、趣味の農業とか定年帰農などもよいと思います。あるいは日常は農業と縁のない生活でも、昔そんなことをやったことあるなという感覚を持っている人や、その人なりの農業観を持つ人が増えることを願っています。

伊藤　先生のお話には建築と近いところが多くあり、非常に楽しませていただきました。ありがとうございました。

対談の様子。右が生源寺先生

しょうげんじ・しんいち｜1951年愛知県生まれ。農学博士。専門は農業経済学・農業政策論。東京大学農学部農業経済学科卒業。農林水産省農事試験場研究員、北海道農業試験場研究員を経て、1987年東京大学農学部助教授、1996年同教授。2011年から現職。日本農業経済学会会長、食料・農業・農村政策審議会会長、生協総合研究所理事長

※生源寺先生に、JIA会員のために参考文献としてご自身の著書を挙げていただきました。
『農業がわかると、社会のしくみが見えてくる』（家の光協会、2010）『日本農業の真実』（ちくま新書、2011）、『農業と人間』（岩波現代全書、2013）

聞き手
伊藤恭行｜CAn・名古屋市立大学教授

05_アーキテクト.indd　5　15.4.20　4:34:38 PM

「JIA正会員」は全員「登録建築家」に　建築家資格制度について考える　<私の意見>

「建築家」を自称することとは

「建築家」という言葉は、原田康子氏が昭和31年末に著しベストセラーとなった『挽歌』に、「フリーアーキテクト」の意で最初に一般的(日常)言語として使われ、広く人口に膾炙したと聞いたことがある。

また「建築家」という言葉自体は、名古屋市立大の友人から提供された資料で知ったのであるが、すでに明治44年の建築雑誌の中で、佐野利器氏が「建築家の覚悟」と題した論説で使用している。そこでは、従来のアーキテクトの日本語訳である美術を主とする芸術家と科学を主とする技術家の二つを併せ持つ専門的名称として、「建築家」の名称の意義と社会的地位が述べられていた。

ともあれ、芸術家、技術家、造家、設計技師、建築士など種々に語られてきた名称とは異なり、「建築家」は建物の自由な形態の表現行為者として、自立した職能人を表す素敵な言葉であることは確かである。

言葉には意味がある。その意味は一般社会の中で誰もが共通に認識しえる一定の概念を持つ。今日一般社会の「建築家」の概念は、ジャーナリズムが使用する曖昧な概念であろう。設計行為(者)が果たすべき責任の対象をとってみても、風土、文化、歴史、伝統に対してのみならず、個人、市民、企業、国・地方自治体など多様な施主の意向に対してと多岐にわたる。つまりジャーナリズムが使用する「建築家」の概念はその社会的責任、義務、権利といった「建築家」の社会的役割を明確に定義された上で使用されているとは言い難い。

JIA会員が全員登録建築家になるとしたならば、まずJIA会員が共通の「建築家」の概念を共有しなければならない。そしてその概念は公益性と共に一定の規準を有し、加えて社会一般が納得し理解できるものでなければならない。

会員相互が「建築家」の概念を共有することは、「『建築』とは」「『家』の態度とは」をいま一度、自己・社会に問い直す良い機会になるであろう。すれば結果として、誰もが平等・公平に獲得できることが基本である、国家資格としての「建築家」の概念との相異も自ずと明確になるに違いない。

車戸慎夫｜車戸建築事務所(岐阜)

世間から問われています。JIA って何ですか？

引いて見ると“「JIA正会員」は全員「全員登録建築家」に”という表題自体に違和感があります。振り返ると100年経っても職能資格制度が成立せず、枝葉にとらわれた議論の末、一体何が大事だったのか分からなくなりそうです。

●JIA設立時の趣旨は、

①建築家としてのわが国を代表する職能団体
②UIAスタンダードの建築家に求められている社会的要請にこたえられる体制

であり、活動の基軸として、会員数を増やし、国際基準と同等の職能基準を満たす建築家資格制度をつくると聞いています。

●そしてJIA って何ですか？と、尋ねられれば、

【組織】UIA日本支部＝JIA
【会員】JIA正会員＝登録建築家＋α

であり、これは、絶対的な定義、いや公理だと思います。

本来、登録建築家資格制度は国際基準と同等の職能基準であり、JIA会員外にも開かれた資格制度を前提としています。将来的には、志のあるゼネコン設計部の方も登録建築家になれるので、JIA正会員＝登録建築家という説明は不適切と思います。

JIAという組織は、国際基準と同等の職能基準を満たす建築家資格制度が成立すれば、その存在価値がなくなるのではなく、わが国を代表する職能団体・会員として、常に社会的要請にこたえられるよう、努力していく必要があります(それゆえ、＋α)。

昨年夏頃より「正会員ルート」が議論され、性急すぎるという意見もあります。しかし、“JIA会員増強＝緩い会員資格”という流れの中で、JIA って何ですか？という外からの目線を失って、枝葉にとらわれた議論でまた何年もかけたくありません。

100年の流れの中でJIAの改革に芦原会長がキックオフされたと受け止めています。パス回しに時間をかけず、ゴールに向かっていくチームプレーのメンバーであることを自覚すべきと思います。

高嶋繁男｜黒川建築事務所(愛知)

05_アーキテクト.indd　6　　15.4.20　4:34:39 PM

特集・連続企画
地域社会と建築をつなぐもの
3

プロポーザルの仕組みづくり②

豊田市の事例について

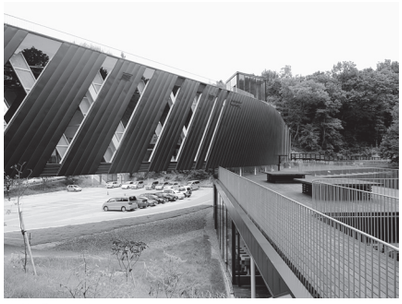
企画担当：吉村昭範（D.I.G Architect）　アドバイザー：伊藤恭行（CAn・名古屋市立大学）

プロポーザルの現状を把握するため、過去に愛知県とりわけ豊田市という中核都市にて企画され、かつ話題となったプロポーザルについて調査を行った。小さな地方都市から全国にむけて公募し、それによって建てられた建築がどのような関係をつくり出したのか、企画から現在の状況までを追った。

ここでは、逢妻交流館（2006年公募、設計：妹島和世建築設計事務所）と自然観察の森（2007年公募、設計：遠藤克彦建築研究所）を対象とし、豊田市役所都市整備部住宅課課長中村誠氏にその経緯ついて伺った。まず全国公募のプロポーザルコンペが行われるに至った経緯については、「（豊田市の）周辺市町村においてプロポーザルコンペによって広くアイデアを募集しようという流れがあったため、豊田市でも同様の試みとして企画された」とのこと。ちなみに豊田市内では小学校や市庁舎などのプロポーザルを年1～2件行っているが、募集範囲が愛知県内や豊田市内に拠点を置く設計事務所に限定されており、かつ実績が重要視されたものとなっている。その意味で全国に門戸を開き、実績に比重を置かない上記二つのプロポーザルは豊田市の試みとして興味深い。

結果として逢妻交流館に至っては、世界的な知名度を持つ建築家妹島和世氏が設計者となったことで建築業界でも広く知られることとなり、国内外のメディアを通じ話題となった。よって私個人の印象としてこれらのプロポーザルは地方都市における成功事例ととらえ、行政側に取材を申し入れたわけであるが、「実際建った後の使われ方や市民の評判はどのようなものだろうか！？」と逆に質問を受けることとなった。奇しくも逢妻交流館は私の中学校区内の建物であり、竣工当初から、ガラス張りの建物は美しいものの市民がその空間や用途を使いこなすまでに至っておらず、夏の室内環境やガラス壁の安全性などについて周辺市民から指摘されているのを聞いている。中村氏いわく、設計入札で建設した他の交流館はどこも評判がよく、市民からも重宝され地域に馴染んでいるという。

逢妻交流館


自然観察の森

建て替え前の既存の交流館に問題を感じていない市民に対し、全国からアイデアを募集し、選ばれた新しい公共建築はまた箱物として孤立してしまうのであろうか？　これについては建物近くを頻繁に通る私自身が良く知っている。竣工直後の印象や市民からの意見、使い勝手における不慣れな部分も時間が経つにつれ馴染んできており、老若男女さまざまな市民グループやサークルによって昼夜問わず利用されている様子をガラス越しに頻繁に見かける。社会に対して新しいものが受け入れられるには時間がかかるかもしれないが、市民のほうに適応力があれば、設計者の意図を超えて新しい交流館のあり方を発見することも多いのではないか、と利用者で賑わう逢妻交流館に足を運び感じた。

また取材後半で「これからの公共建築」について伺ったところ、「数十年で建て替えるものではなく、より長く使っていただけるものを計画していきたい。（実際は逆の意見が多いが）現存のものも建て替えて欲しいという要望より、壊してくれるな！と市民のほうから声が上がると嬉しく思う。また将来にわたってどのように使われていくかということを計画段階で考えていくことがますます重要になる」という行政側の意見が聞けたことが収穫となった。

最後にJIAに向けて伝えたいことを伺ったところ「地元を大切に思い、公共建築によって自分の街を良くしていきたいという思いがあるのであれば、プロポーザルにこだわることなく（最低価格制限のある）入札案件にも積極的に参加して公共事業にかかわっていただきたい。行政は設計者と一緒になって今後の地域に貢献する仕事ができればと考えている」（中村氏談）とお伝えいただいた。

現状のプロポーザルが実績重視であるため、意欲的な多くの設計者が参加できる体制づくりについて調査・検討を行いたいということで今回の企画に参加したわけであるが、前述のお話にもあったように「プロポーザルに参加し勝ち取ること」が目的なのか「地元を大切に思い、建築によって未来に貢献したいという思い」が根底にあるのか、取材を通じて改めて考えることとなった。その意味で今後も行政や他の設計者と共に公共建築、プロポーザル、入札、地元への貢献という、いくつかの主題について議論を重ねていけたらと考えている。

佐々木勝敏｜佐々木勝敏建築設計事務所

05_アーキテクト.indd　7　　15.4.20　4:34:40 PM

沼津御用邸記念公園を訪ねて

2015年2月27日（金）、JIA静岡建築ウォッチングにて、沼津御用邸記念公園を訪れました。前日の雨天とはうってかわった、小春日和のあたたかな日ざしのもと、静岡地域会会員に加え、東海支部の各地域会の皆様や一般参加の方々17名を含めた総勢35名が参加しました。同日、ウォッチングに引き続いて東海支部役員会・懇親会も開催され、東海支部の各地域会相互の交流が深まる一日でした。

沼津御用邸記念公園は、明治26（1893）年に、当時皇太子であった大正天皇のご静養のため開設されました。付近一帯は、温暖な気候と駿河湾の雄大な景観に恵まれ、また、明治22（1889）年の東海道線開通により、その利便性から一躍保養地として注目され、明治末期から昭和初期にかけて多くの別荘が建った地です。

明治33（1900）年頃の沼津御用邸は、和風建築の御殿と御玉突所、牛舎に厩舎といった附属建物に加え御用邸としては初めての洋風建築が増築され最大規模となったとのことでしたが、昭和20（1945）年の空襲での焼失を経て現在は東西附属邸など数棟が保存されています。

クロマツ林を抜け、まずは西附属邸内部を見学しました。明治23（1890）年頃建築された伯爵の別荘に、皇居内の附属建築物を移築して増築したという和風建築です。本邸焼失後から、昭和44（1969）年の御用邸廃止までは、公務に使われ本邸の役目を果たしていたといいます。

内部は、当時からの家具や道具が保存・復元され、また、室名や使われ方、その特徴が示されるなど、当時の様子をうかがいながら見学できるようになされています。厨房の艶やかな白タイル張りの天井と機能的で大胆なトップライト、ストーブなど電化製品がいち早く生活に取り入れられたことに伴う、畳や床板張りの中のフロアコンセント、といった「モダン＆ハイテック」ぶりが、和風建築の建屋のなかにあって、その組み合わせが清々しい印象です。また、補修の際にも当時のものを忠実に再現することをディテールに至るまで徹底されています。例えばガラス板も手焼きのものが再現されており、その詳細について、立ちどまって熱く語り合う会員の姿も見られました。

西附属邸は、建築物として興味深いだけではなく、展示面での工夫もまた、なされていました。訪れた際は、今上天皇が幼少期に過ごされたことにちなんだ「天皇陛下の思い出」展や、沼津藩主水野家の大名雛や市民の方々がつくられたつるし雛の展示がなされ、華やかな印象でした。この地域密着型の展示は、季節に応じてさまざまなテーマが設けられ、四季折々に咲く庭の花々と共に、いつ訪れても異なる雰囲気が味わえる工夫の一つです。

解説を聞く参加者

西附属邸見学の後は、庭園内を、ボランティアガイドの方に解説をしていただきながら、小グループに分かれて歩きました。既存の松林を残し、細かい分棟で配置されていたという建物配置構成、浜の潮風を防ぐようにつくられた、篠竹を束ねて網代編みにした垣根である沼津垣など、この地特有の環境といかに折り合いをつけてきたかをうかがうことができました。これら地域特有の環境と呼応しあう施設のありよう、地域の方々が四季折々に足繁く通い、身近な施設として親しまれる施設利用のあり方、これらが相まって、地域とのかかわりを自ずと意識します。

沼津駅からほど近い場所でありながら、静かで豊かな松林に囲まれた別天地での半日。河津桜もちらほらと咲き始めた穏やかな日に、波の音に心を洗われながら駿河湾の絶景を眺め、浜風に吹かれていると、この御用邸が保存されていることの価値は、文化遺産的意味はもちろんのこと、かつて保養地として愛されたこのエリアの価値と魅力に改めて気づかせてくれることではないかと感じました。

備品や家具が保存されている西附属邸の内部（写真はすべて村松篤氏撮影）

亀井暁子｜静岡文化芸術大学

05_アーキテクト.indd　8　15.4.20　4:34:41 PM

JIA 愛知発　研修見学会

「穂の国とよはし芸術劇場PLAT」

線路側からの外観

3月6日、JIA愛知地域会役員会は、恒例の持出し例会として研修と併せて豊橋市で開催されました。研修は折よく今年1月に「第22回愛知まちなみ建築賞」受賞が決まった「穂の国とよはし芸術劇場PLAT」(以下PLAT)見学会としました。

JR豊橋駅至近のPLATは、2013年5月こけら落としとなった施設です。生の台詞によるストレートプレイの公演に適した規模の、舞台芸術に特化した専門性の高い劇場として誕生しました。線路沿いから眺める外観は、レンガ造のアーチ壁の上に、オーロラをイメージした烏帽子型の天井設備スペースが載る存在感ある造形です。浜松方面の電車からよく見えます。

市のPFI方式(民間資金活用)事業による施設で設計者は香山壽夫さん、施工は大手建設会社と地元建設会社のJVです。PLATを初めて見学する参加者も多く、主ホール(778席)、主ホール舞台裏、奈落、小ホール(266席)、楽屋、道具庫など関係者しか入れないバックヤードエリアも見せていただきました。

開館後2年近くを経ているので運営面にも着目し、施設管理のご担当「豊橋文化振興財団」飯田様に現場の声も聞かせていただきました。施設や公演のPR、道具搬入動線、演目による可変型のステージの組み替え、駐輪場、ホール利用など、長所短所、ご苦労や問題、今後の課題などの貴重なご意見は、設計側の視点としても大変参考になりました。

計画時、採算性や運営面での見通しを不安視する意見もありましたが、現在は周辺都市だけでなく遠方からの鑑賞者もあること、演者側からも良い評価をいただいていることなど、概ね良好な利用状況とのことです。個人的には完成時の見学会にも参加していますが、使う側目線での機能、設備が高いレベルでつくり込まれていて、実績のある設計者の力量を改めて実感しました。舞台芸術に特化したPLATの特徴とポテンシャルを発揮して、演者・観覧者両者から評価いただける施設として今後ますますの活用を期待したいです。

見学会の次にPLAT周辺再開発事業の計画について、担当の豊橋市「産業部まちなか活性課」稲葉様と加藤様にお話しいただきました。

この計画は(仮称)「まちなか図書館」整備基本計画として民間主導により推進中のプロジェクトです。中心市街地空洞化に歯止めをかけ活性化させるため、世代を超えた文化交流拠点を核として据える構想で、PLATに接する水上ビル近隣の狭間公園と名豊ビル開発ビルの改築と周辺整備に組み込まれています。市民アンケートや意見交換による方針策定、エリアゾーニング、他市町村の事例など、素案の立案プロセスや進捗状況についてご説明をいただきました。

「元気で明るいにぎわいのある中心市街地」を目指した市の取り組みは、駅周辺で着実に具現化されています、完成した「こども未来館」「芸術劇場PLAT」、そして今回計画中の「まちなか図書館」。中心市街地だけに敷地確保や関係者との調整も大変であると推測しますが、市民の理解を得て駅周辺が活性化されることを期待して今後の進捗を注視したいと思います。豊橋市の取り組みは空洞化に悩む全国の市や街の共通問題の解消事例として、成功してほしいと市民としての立場からも願う次第です。

研修後の懇親会では水野豊秋地域会長の誕生日と還暦の同日祝いのサプライズもあり、楽しい「とよはしナイト」となりました。関係各位のご協力に改めてお礼申し上げます。名古屋からご参加いただいた皆様、ご苦労様でした。

伊藤彰彦 |
パパカンパニー一級建築士事務所
東三河地区会委員長

可変舞台下、奈落とオーケストラピットを見学

創造活動室を見学

バックヤードの道具搬出入側

05_アーキテクト.indd　9　15.4.20　4:34:44 PM

JIA 岐阜発　会員研修会

自然との闘い　浜岡原子力発電所を訪ねて

参加者の皆さん

3月10日（火）岐阜地域会の会員研修会として、中部電力浜岡原子力発電所の見学会を総勢15名の参加で開催した。現地到着と同時に目に飛び込んできた海抜22mの防波壁。人間対自然という闘いの中で、中部電力の安全性向上の数々の取り組みを勉強させていただいた1日となりました。

以下、参加していただいた方々の感想を載せさせていただきます。

西川光広｜シーテック21

●高速道路を降り茶畑に囲まれた穏やかな道路を30分ほど走ると視界が開け海が見えた。ほどなくして浜岡原子力発電所に着いた。40過ぎにして初めて原子力発電所に入ったが、建築と同様実際に現場を見ることで確認できたこと、理解できたことが山のようにあった。

海抜62mの展望台からは5基の原子力発電所（廃炉措置2基、定期点検中3基）、ほぼ完成した防波堤（海抜22m　総延長1.6km）を俯瞰できる。

発電所構内では大規模な地震対策工事、使用済燃料を保管するための乾式貯蔵施設の建設、約30年かけての廃炉作業が急ピッチで行われており、協力会社を含め4,000人弱の従業員が働いている。

また5号機の原子炉建屋内では原子炉格納容器、使用済燃料と貯蔵プールをガラス越しに見ることができた。

この見学会に参加したことで日本のエネルギー問題についてより深く考えるようになった。次回はぜひ家族を連れて見学に行こうと思っている。

寺下　浩｜
スマイロ・アーキテクツ・ユニット

●見学会は3時間という長さでしたが、原発への関心と見るものの規模の大きさからか、とても短時間に感じられました。

行くまでは多少不安もありましたが、22mの高さの防波堤、防潮扉、非常電源車などの震災後の対策が取られている状況を見て、よほどのことが起きても大丈夫だろうと思える処置に感心しました。太平洋に面した海岸沿いの立地で常時強い風がふき、バスでの構内巡回になりましたが、仕事柄、防潮扉へ目が向き、バスを降りて扉を動かしてみたいな、とも思っていました。

案内をしていただいた副所長様、ガイドの方の説明によると、原発停止後から浜岡だけで年間4,000億円弱、日本全体で4兆円ほどの燃料費がコストアップとなっている状況とのこと。日本の経済を支えてきた豊かな電気事業が、低コストの原子力に頼ってきたことを認識しました。しかし、原発事故の影響を受けておられる方々のことを思うと、再稼働への方向は慎重に、と思います。副所長様の言葉には再稼働への思いがとても感じられ、原子力に携わる方々は今すごく歯がゆい思いをしておられるのだろうと感じつつ見学を終えました。

岩上　順｜文化シャッター㈱

●東北の大震災の後、浜岡原子力発電所は時の総理大臣の指示で稼動していません。現在、新しい安全基準を満たすべくたくさんの工事を行っています。その中でも総延長1.6ｋｍにもおよぶ防波壁は海抜22mの高さをほこり、圧倒的な存在感を放っていました。自然災害に耐えうるべく建築技術の粋を集めたものです。鉄筋コンクリートの鉄筋にはJIS規格最大級サイズのD51（太さ約5cm）を使用しており、一般の建築現場でもまず目にすることはないと思います。その防波壁の工事も終わりを迎えようとしており、着々と再稼動に向けての準備を整えていました。そのほかにもたくさんの検討がなされており、建築にかかる責任の大きさと、建築という枠の大きさを改めて感じさせられました。再稼動の是非に関しては意見を言う立場にはありませんが、数多くの人の努力があるということは私にも感じられました。

河野二朗｜三晃金属工業㈱

●原発で思うのはまず福島、原発は怖い、ということ。震災前までは原発に対して何の思いもなくただの発電所ぐらいの認識しかなかった。今回初めて発電所構内を見学しイメージが少し変わった。無知まるだしで言ってしまうが、人間が何もしなくても熱を出し続けていくなんて、よほど大きなエネルギーなんだなあというか、この熱自体が電力になるのではないとしても、こりゃ核エネルギーに頼りたくなるのもわかるよなぁと、とにかくエネルギーとして凄いものなんだと感じた。その大きなエネルギーを地震、津波から守るための対策工事を見学し、再稼動もあり?かなと。原発より遠い地域に住み原発と縁のない生活をしている者が簡単に言ってはいけないと思うが、エネルギー事情などを考えると必要と思う。再稼動に賛成、反対の意見、どちらの意見も疑問に思うこともあるが、電気はあって当たり前の中で暮らしていて、50年後、100年後に化石燃料、核燃料に代わるものができるのか?　電気のある当たり前の生活ができるのか?　もう少し議論の余地があると思う。

岡田好生｜㈱サンレール

構内を見学

05_アーキテクト.indd 10　15.4.20 4:34:46 PM

劇場をテーマに議論

世界劇場会議名古屋 フォーラム 2015

JIA 東海支部後援　CPD 申請中

●**日時**：5月29日（金）　受付13：00～

●**会場**：愛知県産業労働センター「ウインクあいち」1202会議室
（名古屋市中村区名駅4-4-38）

14：00～16：15

Session-1 「劇場の天井は大丈夫か？」

東日本大震災で多発した大空間における吊り天井の崩落事故。既存の劇場の天井は安全なの？　平成26年4月に改正建築基準法施行令が施行され、特定天井（高さ6mかつ面積200㎡超の天井）については新たな設計基準が定められた。多くの劇場・ホールの客席天井が既存不適格となり改善を迫られていると思われる。また、今年度から建築物の定期調査報告の対象として、特定天井を含めることを義務化することになった。施設が直面している重大な課題について、分かりやすく解説し、対応を考える機会としたい。

講師　本杉省三（日本大学理工学部教授）
事例報告者　野島秀仁（KAJIMA DESIGN）
進行　松本茂章（公立大学法人静岡文化芸術大学文化政策学部教授）

16：30～18：45

Session-2 「劇場で働きたい！」

劇場にはどんな仕事があるんだろう？　求められる人材とは？　専門教育を受けていないとダメ？　大学卒は使えないって本当？　独自のアートマネジメントや音響・照明の資格・研修制度はあるの？　大学と劇場の連携による人材育成のあるべき姿とは？　採用側が提示できる雇用条件・雇用環境と劇場で働きたい人たちとの間で起こりうるミスマッチとは？

話題提供者　籾山勝人（長久手市文化の家事務局長）
中　康彦（損害保険ジャパン日本興亜㈱・ひまわりホール係）
児玉道久（㈱若尾綜合舞台代表取締役）
山田　純（名古屋芸術大学音楽学部教授）
進行　山出文男（NPO法人世界劇場会議名古屋副理事長）

※やむを得ない事情で講師が変更になる場合がございますのでご了承ください。

19：00～20：30

交流会

会場　愛知県産業労働センター「ウインクあいち」1204会議室

●**参加費**：

◇セッション参加費
一般　2,500円　（ITCN会員　2,000円）
学生　1,500円　（ITCN会員　1,000円）
Session-2参加券　1,000円

◇交流会参加費　2,000円

＜参加費振込先 銀行口座＞
口座番号：三菱東京UFJ銀行　栄町支店　普通　1186768
口座名義：特定非営利活動法人世界劇場会議名古屋

※確認のため、振込を証明する書面をFAX等にて事務局まで送付してください。

●**定員**：100名

●**申込先・事務局**：NPO法人 世界劇場会議名古屋（ITCN）
〒460-0002 名古屋市中区丸の内1－14－12グランビル2B
TEL&FAX 052-232-2270　　E-mail itcn@itc-nagoya.com
HP http://www.itc-nagoya.com

「JIA東海支部大会2015」に向けて

東海支部大会の実行委員長を務めます、愛知地域会の浅井裕雄です。

昨年の秋ごろより、支部大会に向けて、準備を進めてきました。ようやく支部大会の骨格が見えてきましたのでご報告します。

東海支部大会2015のテーマは、**「都市多生」（とし　たしょう）**。

都市の表層は時代を反映しながら生まれます。しかし、都市の骨格は長い時間をかけて生まれ変わる必要性が見えてきました。支部大会では、名古屋を上から下からと眺めながら、都市の生まれ変わり方を考えようと思います。

戦後、経済発展を続けてきた名古屋やこの国の都市は、産業構造の変化や人口減少（名古屋は微増）もあって、下り坂の変化を強いられています。

今回の大会は、最初に名古屋の街を違った角度から見ていただこうと思います。

「下から眺める名古屋」…水上輸送路として活用されてきた、「中川運河」と「堀川」にボートに乗って、運河で名古屋を縦断して眺めてみます。さらに、名古屋城のお堀へおりて、石積みの下から眺める名古屋（現在お堀の見学は調整中）。

もう一つの視点「名古屋を上から眺める」…大会会場は、名古屋テレビ塔としました。テレビ塔は地デジ化に伴い、電波塔の役目を終え、次の役割を考える時がきています。

これらの場所はそれぞれ、都市の機能になくてはならないモノでした。都市における新陳代謝が、住宅レベルから大きな土木レベルにいたるまでさまざまに生まれ変わる中で、建築家の役割はさらに重要と考えます。

ぜひ、この機会に下り坂の都市を皆で考えましょう。

大会日程：11月13日（金）
エクスカーション：中川運河・堀川ツアー
基調講演：建築家・内藤廣氏　シンポジウム（内藤廣氏＋数名による）
会場：名古屋市中区久屋　名古屋テレビ塔　4F　ザ・パークバンケット
14日（土）　長者町ゑびすまつり、JIA東海支部設計競技（予定）

05_アーキテクト.indd 11　15.4.20 4:34:46 PM

2014年度「日本建築家協会優秀建築選100作品」 入選された東海支部の皆さん

高志の国 文学館〈JIA優秀建築賞も受賞〉

伊藤 恭行
CA n（シーラカンスアンドアソシエイツ名古屋）

この計画は、2010年に「富山県立ふるさと文学館」設計プロポーザルで選ばれて実現したものです。富山市中心部の松川沿いに位置する旧県知事公館を改修し、新たに展示棟を増築、既存庭園の改修と周辺ランドスケープを整備することで、万葉の時代から続く越中文学に関する文学館として再生する計画です。旧知事公館を屋敷、展示棟をそれに付随する蔵として位置づけ、既存の建物と庭を尊重しながら新しい空間の形成を目指しました。

展示棟は「蔵」である閉鎖的な空間と「土間」である開放的な空間から構成されています。「蔵」は文字通り文学館の貴重な展示品や収蔵品を収納する蔵であり、「土間」は蔵と蔵との間をつないでいる動線であるとともに、ゆったりととどまることのできる場ともなります。「蔵」の外周はすべて淡いシャンパンゴールド色にアルマイト処理されたアルミ鋳物パネルで覆われています。「土間」は天井高を抑えた空間で、水平方向に広がりながら西側の庭園につながっていく構成です。この開口部には3m×7mの大きなペアガラス3枚を設置することでサッシマリオンを可能な限り減らしました。

鋳物パネルは、アルミ生産が富山県の基幹産業の一つであることから選択しました。アルミ鋳物は1枚ごとの単品生産となるため、地金成分の微妙な差異や温度や湿度などの違いにより、パネルごとに微妙に異なる風合いとなります。工業製品でありながら自然素材に近い特徴を持つ面白い素材であることを学びました。また、大スケールのペアガラスも国内では富山のガラス工場でなければできない製品となっています。

知事の陣頭指揮と県職員の方々の熱意に支えられ、大勢の施工者やメーカーなどの協力により完成した建築が、大きな賞をいただくことになり本当にうれしく思っています。

都市に開いていく家

栗原健太郎・岩月美穂
studio velocity一級建築士事務所

このたびJIA優秀建築選に選ばれ大変光栄です。

住宅は施主が限定されているため合意形成がしやすい反面、施主仕様の社会的に閉じた空間=特殊解にもなりやすいので、住宅設計が示せる社会的飛距離が試されていると思うし、住宅に公共性をいかに持ち込むかが重要だと思っています。陽の光や風や眺望などの環境は各々の相互作用によって生まれており、隣の家にとって良い環境が生まれているとき、多くの場合で自分の敷地の環境も良くなっていることに気づきます。

本件においては住宅を2棟に分割して可能な限り引き離し、近隣の建物と併せ4棟で囲む大きな森をつくりました。隣地と連続し共有せざるを得ない「環境」が、いつどのようなとき良い状態になるか。「家族」にだけ閉じず、「今」にだけ閉じず、「所有境界」にだけ閉じず、他者性をいかに許容しうるか。住宅が公共性を持てるかどうかを考えていきたいと思っています。

笠松の家

佐々木 勝敏
佐々木勝敏建築設計事務所

この住宅を計画していた頃から、平面を矩形とし軒のある勾配屋根を載せた外観を採用するようになった。住宅が連続する街並みの中で、新たに加わる住宅が突出せずに新しいあり方が提案できないだろうかと考えたためである。個人住宅という用途において外観は街並みとしての公共性を重要視し、個人の要望や住宅建築の要点を内部に集約するとどのようなものができるのか、今までと異なるアプローチによって何を見つけられるのか、ある種規制のかかった状態でのスタディはとても興味深かった。過去につくられた意匠との類似には既視感というレッテルが付きまとうが、勾配屋根を持つ住宅は古今東西最も普遍的な住宅の型であり、それを基点として「新しい形態」ではなく「関係性を空間化」した住宅が提案できたらと考えこの住宅を計画した。

05_アーキテクト.indd 12 15.4.20 4:34:48 PM

コヤノスミカ

光の郭

川本敦史・川本まゆみ
エムエースタイル建築計画

<コヤノスミカ>若夫婦家族のための母屋に隣接する増築である。母屋との生活領域を完全に分離させる増築は互いに完結できるものの、家族同士の関係や母屋とのつながりを断絶しかねない。そこで、母屋の機能を使い、増築部は最小限の生活領域として互いの距離感を計り合うことで、緩やかに引き継がれていく豊かな関係が継続できる共存する増築を考えた。まず、コの字型の小さな耐力壁で構成された単純な構造の連続性の中に生活領域を集約しながら、そこにSPFに構造用合板を両面張りした69㎜のサンドパネルでつくられた逆V梁を架けていった。この連続性は生活領域の分節を意識させながらも、光や空気や視線が自由に行き交う伸びやかな空間を生む。増築という関係付けの中で、住み手の想像力を膨らませる豊かさや大らかさが、互いに委ね合うことができる余白を残していけることを意図している。

<光の郭>敷地は、南側境界際に2階建ての隣家が建ち迫る陽当りの悪い場所であった。そこで、光の採り入れ方や導き方によって等価な光の空間を構築し、光の在り方が住まいの多様性や豊かさを築いていくことを考えた。まず、9.1mの正方形の平面構成に対して、屋根の四方に天窓を設けて天空光を享受する。天空光は小屋梁によって絞られ、さらに下見板張りのシナ合板によって柔らかな光に変換され、空間全体を包み込む。また、プライベートを必要とする空間を大小異なる4つの箱に割り当て、それらの間に生まれた路地のような領域がパブリックな居場所となる。おのおのの箱は大きな気積の中でボリュームバランスを図り、光のリズムとスケールのリズムが相まって、住み手の生活領域の可能性を引き出していく。「光の郭」は光のコートハウスとしての普遍性の中に新たな価値観を見いだす住まいとなった。

静岡ガス本社ビル

小谷 陽次郎
日建設計

このたびはJIA優秀建築選にご選定いただき誠に光栄に存じます。このような素晴らしい設計の機会を与えていただいた静岡ガス様、また設計チームはじめ建設関係者の皆様に改めて感謝いたします。

静岡ガス本社ビルは、エネルギー供給会社の社屋として、全館環境技術のショールームとして計画したものです。ガスエネルギーと温暖な静岡の気候を生かした自然エネルギーの融合により、徹底した省エネ化、CO_2排出削減を目指しました。

前面道路に面してオープンスペースなどを設けて街に賑わいをもたらす仕掛けを行い、ファサードには静岡県産ヒノキを日射遮蔽ルーバーとして用い「地域のため、地球環境のため」に貢献する静岡ガス様の企業姿勢を体現するシンボルとしました。

今後とも、決して独りよがりにならない、社会に貢献できる建築づくりを目指して設計活動を進めたいと考えます。

工場から家

浅井 裕雄
裕建築計画

施主からの依頼は、あの東日本大震災の1カ月後のことでした。まだ世の中は混乱していた最中で、価値観が変化し始めた頃でした。もともと、クライアントのお父さんが長年使ってきた鉄工所を住宅にできないかという依頼でした。私は古い工場のなんとも寂れたところがスキで、早速カメラを持って鉄工所を撮影しました。錆びたハンガードア、油煙で薄汚れた鉄骨、油の染み込んだ土間を写真に収め、美しい汚れを残すことにしました。

現在、中古住宅の流通はアメリカでは9割、イギリスで8割と圧倒的に中古が多く、日本は約1割。人口が減ってゆく中、残されている建築をどのように見てゆくか、建築家の目利きが問われていると感じます。100年ぐらい先を想像してみて、50年経った家をさらに50年使ってみる試みを始めましょう。新たな価値が見えてくると思います。

05_アーキテクト.indd 13 15.4.20 4:34:51 PM

2014年度リフレッシュセミナー 参加レポート 2015年3月15日（日）～ 17日（火）

日常の仕事から離れ、熱海にある温泉保養施設で開催されたリフレッシセミナーに参加してきました。公開コンペで選ばれた素晴らしい建築空間での講演会、全国から集まったJIAメンバーとのグループディスカッションは、普段使っていない脳の一部が刺激され、とても充実した三日間でした。

「建築とジャーナリズム」というテーマの中、大森晃彦先生は紙媒体がWEBマガジンに移行している中、「建築議論の場となるプラットフォーム構築の必要性」「現代における建築の評価は質より人々の合意の影響が大きい」というお話をされました。藤村龍至先生からは過去に発表したフリーペーパー、WEBマガジンの運営を生かして、数年間行ってきた市民ワークショップの経験から「行政と市民のあいだにしっかりと専門家（建築家）を位置づけることが必要である。その上で建築にかかわる人々の合意を形成・設計することが現代の建築家の役目ではないか」というお話がありました。

お二人の先生の講演は大変示唆に富んだ内容で、建築にまつわるさまざまな事象を再考するきっかけを与えていただいたように思います。

WEBが全世界に発達した世の中、建築が完成、または計画が発表された瞬間に情報化され、あっという間に広まってしまう。消費のスピードがますます加速していく状況に対する、建築のあり方について非常に危惧を抱いております。しかしながらWEBをうまく利用することで、建築のアーカイブ、プラットフォームの構築も可能だと思います。

グループディスカッションでは4人でプレゼンテーションをまとめると同時に、全国各地域会の活動内容、将来JIAのあるべき姿を共に語り合うことで、JIAという組織の可能性を改めて感じました。このセミナー経験で得たものを生かし、自身の所属する地域会活動をより盛り上げていきたいと思っております。お二人の先生方、サポートしていただいた委員会の方々、事務局の方々には大変感謝しております。このような貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。

寺下　浩｜
スマイロ・アーキテクツ・ユニット

■第１日目

大森晃彦氏の講義。武田五一に始まる「新建築」の系譜は興味深いものであった。初期の頃は左派の連中が建築ジャーナリズムをけん引し、「新建築問題」を機に解雇されると、その後建築批評が遠ざけられるようになった。紙媒体の建築雑誌が後退するなかで建築批評や議論の場は彼方に追いやられ、これらのことが建築家による自浄作用の効能を無力化させてきたのだと感じる。大森氏は、共通の議論の場や批評の場を担保する新たなプラットフォームづくりが重要であると話された。そのプラットフォームは建築と社会の相互乗り入れを可能にすべきだと思う。

この日の夜には各自が持ってきた地酒や地域の名産品が振る舞われ、大宴会となった。一次会で終了するはずもなく講師のお二人も含めて二次会へ。深夜までの大討論会というか宴会が続いたのであった。

二日目にも少し触れる。藤村龍至氏の講義では鶴ヶ島や大宮のプロジェクトが紹介された。その中身は市民・行政・議員・首長に対する構築環境教育であり、建築教育を実践されていると感じた。藤村氏の「超線形設計プロセス論」は、討論型アンケートを経て評価設計をしながら進める彼の設計プロセスに見事にかなっており、そのロジックが、ワークショップの一定の軌道を担保している。藤村氏がこれまでの

熱海リフレッシュセンター。海を望む露天風呂

活動を通して培った批判工学主義的ソーシャルアーキテクトの視点が結び付けた結果なのだろう。

グループディスカッションで私の班では、福岡地域会長が力技のかじ取りと絶妙なバランス感覚とキャスティングでみんなをリードされた。文京建築会の方は冷静で緻密に論を組み立て、神戸地域会の方は重量級のインパクトで結論へと引きずり込み寝技で抑え込まれた。ブラック関口こと私は…（お見苦しいので削除させていただきました）。

私たちの班は大トリで起（学んだこと）、承（問題提起）、転（手法）、結（決意）のストーリーで発表し、大笑いと大盛り上がりで幕を閉じた。JIAが建築と社会の仲介者となり、よりよい建築と社会を築く構えを持とう！ そんな感じの決意表明だったような…。支部・地域会のみなさま、参加させていただき、ありがとうございました。

関口啓介｜人建築事務所

■第２日目

2日目は、以下のスケジュールで進められた。

○藤村龍至氏の講義（フリーペーパー「ROUND ABOUT JOURNAL」のイベント活動から、東洋大学建築学科の授業の一環として行われた「鶴ヶ島市」でのソーシャルデザインのプロジェクトなどの説

05_アーキテクト.indd 14 15.4.20 4:34:52 PM

講演会

講演を終えてのディスカッション

グループごとの発表

明）　○4つのグループに分かれてのディスカッション（セミナーで学んだことについて最終日の発表準備）　○フリータイム（MOA美術館見学やセミナー内の屋内プール、露天風呂にてリフレッシュ）

藤村氏の講義は、メディアが伝える論客のイメージとは違い、誠実な人柄がにじみ出る丁寧で充実したものだった。「鶴ヶ島なう」と藤村氏が大学に授業で通うたびにツイッターでつぶやいていたことが、知人を通じて鶴ヶ島市市長との出会いにつながったという話は、メディアの寵児、藤村氏ならでは。「伝える」ために自ら情報を「編集」して有効に発信し、「仮説」と「実験（活動）」を繰り返すことで、小さなきっかけを大きな活動へと広げることができていることがすばらしいと感じた。当初は学生の設計課題を市長に見てもらうという程度の話が、継続することで「鶴ヶ島プロジェクト」、そして鶴ヶ島市の公共建築の統合のマネジメントにまで展開したのがいい例だ。伝えるという部分では、ワークショップなどの集合写真の写り方にも強いこだわりがあり驚いた。

氏の設計した建物に関する作家の主体性という意味では、個人的には違和感があるものの、川上作業も含めてそのプロジェクト全体の環境を完全にデザイン・掌握していることが、今回の講演の中から圧倒的な説得力を持って迫ってきた。つくらない時代と言われる昨今、建築家が何をデザインして、どんな役割を求められているのか問いかけてきているようだった。地方で活動する私はどうなのだろうかと自問する。「内側に向いて論を組み立てることができたことで、外側に広がっていった」という藤村氏の言葉がヒントとなるように思う。外に向かって発信することや評価ばかりに気を捕らわれるのではなく、まずは自分自身の中でしっかりとした論を立てることから始めよう。私は「名張なう」から始めたい。

森本雅史｜森本建築事務所

■第３日目

リフレッシュセミナーの最終日。前日も遅くまで会員が集まり熱いトークが交わされた余韻が残ったまま、3日目は4班のプレゼンテーションが行われた。

A班…ジャーナリズムとの共存。今までジャーナリズムは向こう側だったが、HPやブログなどで今後は自ら発信できる活動の必須アイテムとなっている。

B班…お上と民（行政と住民）。公共事業は上から降りてくると依存するのではなく、住民が自らの責任を持って発信、参加することで満足度の高いものができる。そのために具体的なビジョンを持ってメディアに発信する力を成長させなければいけない。

C班…発信をデザインする。いろいろな発信ツールがあるが、誰に向けて何を発信するか。内に向かいながら外へ出していく。JIAの可能性は中間的な専門家集団。市民と行政、社会とつなげるのも地域に根ざす建築家の役割。

D班…4つのキーワード「学び、問題提議、手法、決意」。JIAでできること、属することの意義を問う。建築家の作家性としての既成概念から脱却して、社会性のある担い手として再構築する。行政・市民・子どもたちへ建築教育を行うことで、良いクライアント・住まい手を育てる。意伝する。

発表の感想として、JIAに所属する建築家が、地域の中の行政と住民とをつなぐアドバイザーとして認知され、建築デザインが街と景観と人との関係をつくっていくことを望む建築家像が見えてきた。

建築とジャーナリズム・メディアへの発信とソーシャルアーキテクトをテーマに参加した建築士が講師の話を受け、班ごとに意見を交わすことで、個人の持つ発想力が数倍に広がり、建築家の役割やこれからの存在意義を考える貴重な機会を得ることができた。

地域を超えた会員との出会いはフェイスブックなどでつながり刺激を受け、これからの糧にもなっている。リフレッシュセミナーに参加して日頃の概念を変える有意義な機会を得たことに感謝したい。

川口亜稀子｜Liv設計工房

05_アーキテクト.indd 15　15.4.20 4:34:53 PM

報告：愛知県春日井市 ことぶき町公民館プロジェクト

“住民力”でワークショップ

■住民のための公民館を

髙橋　敏郎｜愛知淑徳大学

公園から見ることぶき町公民館

3月14日（土）10時、愛知県春日井市中心部ことぶき公園横の敷地に「ことぶき町公民館」が完成し、関係者、町民など約200名が集まり、太鼓日本一に輝いた町内の「転輪太鼓」の若者によるお祝いの演奏もある中、盛大に完成記念式典が行われた。

この「公民館プロジェクト」で、3年前からプロデューサー役を務めさせていただき、町民ワークショップの企画、指導もおおせつかった私にとってもたいへん感慨深いものとなった。

事の起こりは2012年3月、町内会総会において「防災組織づくり準備委員会」が設置され、審議の過程で「一時避難所としての公民館の耐震性」が問題になり、耐震補強について相談を持ちかけられたことであった。関係者に既存建物の図面などを探してもらって見てみると、耐震補強を検討するまでもなく新築の方が有利であることが明白で、不適格であると報告した。ことぶき町は、高齢化率が春日井市第2位、65歳以上人口が40％弱で年金暮らし、町内会費300円／月の値上げも厳しいほどで、しかも公民館建設費の積み立が750万円しかないという圧倒的資金不足の現状であった。

2013年5月、「公民館老朽化対策委員会」設置。私に試案の提示が求められた。平面図数案をもとに概算、建設資金捻出についても検討が進み、9月に市への補助金申請が行われた。この段階で資金計画は自己資金850万円、市補助金1,500万円、市に貸していた公衆トイレ用地の買い上げ400万円、計2,750万円。不足分を寄付と借入金でまかなうというお寒いものであった。

◉ 簡易プロポーザルへ

これまでの経緯から私に設計の依頼が来たが、町内会員であり不明朗さを免れないと辞退し、代わりに提案したのは「簡易プロポーザル」により設計者を公募することと、建設資金の圧縮と町民に公民館を意識し愛着を持ってもらうため「町民ワークショップの実施」をすることである。

プロポーザル要綱は類似案件を下敷きに作成、応募資格を「日本建築家協会（JIA）の登録建築家あるいは日本建築士会連合会の統括専攻建築士であること」とした。理由は、将来的な二つの資格の統合を願い、また、建築家として自覚ある人の参加を希望したためでもある。同時に、住民ワークショップを積極的に導入し、主導できることも応募条件であった。

設計希望者が多すぎると町内会に負担がかかるため、ごく内輪で公示し最終的に5組の設計事務所が技術提案・図書提出となった。2014年2月、プロポーザル公聴会が行われ審査の結果、Liv設計工房（川口亜稀子さん）に設計が委託された。

◉ ワークショップに夢中

4月初旬「公民館建設委員会」が設置され、私は特別顧問（プロデューサー）に任命され、川口さんと設計契約。交付される補助金の関係から設計期間4.5カ月、工事期間5カ月という制約の中で設計者、工事業者双方にかなりの負担を強いるものとなり、建設費の都合から設計変更が相次ぐ結果となった。

寄付、借入金の募集は10月に開始、当初は低調であったが工事が進行し、建方が済んだ12月中旬には寄付500万円、借入金800万円を突破し、関係者一同安堵した。

9月下旬、樹木の伐採撤去を皮切りにワークショップが行われた。駐車場の舗設には旧知の仲介でタイル製造会社から約10,000枚のタイル提供を受け、12月中旬、雨中（翌日は雪）の受け取り作業。2月に入り、私の工房に週3日ほど老人たちが集合し、部材の加工、舞台平台、椅子運搬台車、空調ルーバーなどの製作に熱心に取り組んだ。2月中旬から毎週土日に住民ワークショップ。小学生から80代まで常時20人前後が参加し、ホールの床塗装、内外の倉庫棚製作、ヌレ縁の製作などを完了したのと建設工事が終了し工事引渡しされるのがほぼ同時となり見事完成に至った。建方が過ぎると年寄りたちが毎日のように公園のベンチに席を占め「私たちが現場監督よ」と言っているのがとても印象的だった。

◉ 建築家ってなに

JIAが公益社団法人になって3年、建築家はどのように市民とかかわっているのか。今回の公民館プロジェクトは、自分への問いでもあった。一般市民は建築家が何をする人かを知ら

05_アーキテクト.indd 16　15.4.20 4:34:53 PM

完成記念式典にて「転輪太鼓」の演奏

ず、設計業者との差も分からない。社会に地域にアプローチする方法はないものであろうか。JIAの実働を支えるアトリエ建築家が住宅だけをつくっていていいわけはないであろう。今回は幸いにも住民の協力を得、設計者の理解も得、住民のための公民館をつくることができた。このようなプロジェクトがJIA若手建築家の社会とのコンタクトの嚆矢になればよいと思うのだが。

■公民館プロジェクトで得たこと

川口亜稀子｜Liv設計工房

公民館プロジェクトの話は、高橋敏郎先生と愛知事業委員会で「素材の旅」「建築家フェスティバル」などで一緒に事業にかかわっていた中で浮上し、ぜひプロボーザルに参加させてほしいと希望していた。

要項が届き、さっそく現地確認をして感じた建て替え前の公民館は、軽量鉄骨造の控えめな建物だが、賞状やカラオケセット、お神輿などの備品などが残されていて年数を経た分の物語があり、町民によく利用されている雰囲気を醸し出していた。ではあるものの、公園に隣接しているのにボール避けのネットが張られ、公園に出られないことがもったいない印象を受けた。

東西24m南北9mの長方形の敷地に、地域住民を結びつける拠点としての機能だけでなく、50名以上を収容できるホールと災害時の一次避難施設としての耐震・防火性能を要し、ローコストと短工期で完成する条件なので、汎用性ある部材で構成する鉄骨造で計画を進めた。

公園とのつながりを積極的に取り入れ、建物の中央をオープンキッチンのあるカフェコーナーとした土間部分をつくり、北のメイン出入口から公園へバリアフリーで行き交うことができるようにして、公園でのイベントや災害時の炊き出しにも対応可能とした。ホールとの間は引き込み建具で仕切り、建具を外すとホールと一体化してスペースが広がる。

ホールの東面は全開口できる倉庫を設け、椅子やテーブルの出し入れが容易で、お神輿なども収納できる広さを確保。排煙窓でもあるハイサイド窓から桜の花が見える楽しみも取り入れている。

南面は全面掃出し窓として濡れ縁を設けて、公園を望むように腰掛け、出られるようにした。

トイレや用具入れ、手洗いを西側に集め、公園の公衆便所に隣接した入り口を設けることで、利用者が大勢の場合にも困らない対策とした。

用途に応じて可変するプランとカフェコーナーが住民のコミュニティーを育む場所となる案が採用されてから、高橋先生とことぶき町住民の建設委員会の皆さんと密接に打ち合わせを重ねてきた。予算オーバーする部分は使い勝手や材料を見直し、自分たちでできることはワークショップでやろう、と前向きな姿勢で工事費から外し、地元の建設会社の協力も得て、なんとか着工に向かい、厳しい工期内で完成することができた。

ワークショップでは、高橋先生を中心に地域の方々が積極的に参加し、駐車スペースに敷くタイルを受け取りに雨の中2tトラックで運んだり、床塗装をしたり収納内のラックや濡れ縁をつくったりなど、住民たちができることを見つけてはワイワイ言いながら作業を進めた。その姿は微笑ましく、建物が完成する頃には多くの住民がすでに使い勝手を把握し、素早く掃除や引越しの準備が行われていた。住民が積極的に携わり共同作業をすることで、近隣とのつながりがより深まり、地域の拠点となる公民館の完成を皆で見守り祝うことができた。

「人のつながりが育つ場を形にする」。設計士の役割を再認識する有意義な仕事に携われた。今後このようなプロボーザルが増え、次世代の建築家の可能性につながることを期待したい。

公民館内部

ワークショップにて駐車場にタイルを舗設したり（左）、濡れ縁製作に取り組んだ（右）

05_アーキテクト.indd 17 15.4.20 4:34:54 PM

木に向ける視線と森に向ける視線 ②

tele-design collaboration network
名古屋市立大学大学院 芸術工学研究科 准教授　久野紀光

失われた街を模型で復元しようと始めたが、上空から見た地図や写真などの平板な資料に限られては正しく街を復元することができず、もどかしさばかりが募った。こうして始まったのが「記憶の街WS」だ。

このWSでは、白模型を現地に持ち込み、住民の方々に自宅の屋根や壁、思い出深い街角の着彩をお願いしながら記憶を語ってもらう、といった枠組みを考えた。もちろんこのことで、街の方々の心傷を逆なでする可能性や、住民を刺激して復興事業進行の妨げとなるかもしれないという大きな不安があった。しかし不安をよそに、これまで30あまりの街や集落でこのWS開催をお許しいただき、住民の皆さんは時に嬉しそうに、時に涙しながら、湾内に浮かぶ養殖筏の置き方やらちょっとした街角のつくり込みの甘さなど、たくさんのダメ出しをしてくださった。淀みなく溢れる記憶が、白い模型を彩りある街に変えていった。

WS開催において難しかったのは、会場探しだった。より多くの記憶を記録する以上、来場くださる方に「自分の家がない」とさせてはならず、模型制作範囲は広くなる。しかし、この巨大な模型を持ち込める場所に各街は乏しい。まして、仮設住宅はあちこちに離散しており、一会場に固定してはより多くの住民の声を聞くことができない。総じて、各々1週間程度に設定したWS中、2～3回の会場移動が伴った。

こうしたなか、ふと気付いたことがあった。そもそも3.11以前からWS開催ができる立派な施設などない街と、それらが(高台に)ある街という差が歴然とあり、復興事業において前者は「防集法(防災集団移転事業促進法)」や「漁集事業(漁業集落防災機能強化事業)」による補助金に頼る以外になく、山を切り崩し得た大量の土砂によって沿岸部の嵩上げや巨大な防潮堤を建設し、山に造成された平場に海から離れた安全な復興街をつくる手立てを採る傾向が強い。一方で後者は、「防集」や「漁集」の適用条件である巨大な防潮堤は建設せず、海への眺望保持を重視した復興を別の原資によって“選択”する街もある。この違いは何か?

タブーかもしれないが、筆者が実見した“選択”を施した街は原発の補助金を得ている街だった。もちろん、原発の全面廃止を求める世論は、3.11で得た教訓から国の未来に向けた大乗仏教的考え方、すなわち“森への視線”だ。他方で、リアス式の天然良港や、山からの豊富な栄養分に満ちた湾を元手に漁業や養殖業を生業とする多くの街にとって、高い防潮堤を建設し海から離れて生活することは、住民の日々の生活や郷里の行く末から言えば致命傷になりかねず、したがって防潮堤建設や山の切り崩しをしない復興を、という切実な願いは小乗仏教的考え方、つまり“木への視線”と言える。そして嘆かわしいことに、これらの“木への視線”は“森への視線”と背反関係となり、そのジレンマに多くの街が苛まれているのが現実だ。なんという皮肉だろう。

昨夏、神戸で3.11に関する小さなシンポジウムが開催され、筆者も登壇した。このとき、防災学の大家である室崎益輝先生(神戸大名誉教授)が話された内容が胸に響いた。曰く、「(常に人間の想像を超えて起きる)災害へ物的なプロテクトを造営することが真のセキュリティではない。それは、街のアメニティとコミュニティ形成によってのみ創られる」。

省みて、われわれのような建築設計を生業としている者は、住民が共有する街の心象風景を育むきっかけづくりを設計の下位条件に留めていないか?　あるいは、巨大なマネージメントが啓蒙する利便性を楯に、エネルギーに頼って空調システムや衛生システムを完備させ、建築内に自己完結させて街に出ないで済む生活を穏然と支え、コミュニティ形成への意識を痩せさせていないか?

さらに、特権性を謳い文句に購買意欲を煽って、床を積み上げ地球の表面積を悪戯に増やすことに加担してないか?　これらもすべて、経済停滞の回避を優先せよという錦の御旗の下に矛盾すら正当化される“森への視線”か?

個々の木が育たないことには、豊かな森などつくられるはずもない。そのために、建築に何ができるのかを、真剣に考えアクションする期日は迫っている。

女川町のまちづくりデザイン
(出典:女川のまちづくり、女川町発行)

岩手県山田町での WS 風景

巨大な仮設のベルトコンベアで山から沿岸部に土砂を運ぶ
(陸前高田での復興事業風景)

05_アーキテクト.indd　18　　15.4.20　4:34:54 PM

防災・減災情報の可視化により災害イメージを喚起し備えを推進

名古屋大学減災連携研究センター 地域社会減災計画部門 助教 倉田 和己

巨大地震をはじめとする災害に対して備えを進めるためには、発生する被害をイメージすることが不可欠である。明確なイメージは備えを始める動機となり、対策を推し進めるための原動力ともなる。建築技術者であれば、施主や居住者に対して災害リスクを説明するために、より具体的な被害像を描ける必要がある。このような目的で作成されるのが被害想定であり、ハザードマップである。

しかし、仮に「地表震度6弱、鉄骨造30階建ての建物が共振した場合の揺れ」と言われて、一体どれだけの人がその様相を仔細に思い描けるであろうか。抽象化された情報は迅速で画一的な処理を可能にするが、必ずしも人間が理解・行動するのに適した情報とは一致しない。ここに、昨今の防災・減災情報が抱える問題点がある。情報は伝えること自体が目的ではなく、相手に伝わり、相手が行動することによって、初めて価値を持つと言える。すなわち、防災・減災情報を対策行動に結びつけるための工夫が不可欠である。

筆者はこうした課題に取り組むべく、防災・減災イマジネーションの支援技術の開発を行っている。その肝要は、可視化による情報の「スケール感」「時代感」「我が事感」の補完である。以下、具体的な3つの事例を用いて説明を試みたい。

写真1は名古屋大学減災館1階に設置の床面空中写真に、プロジェクションマッピングの技術を用いて天井から南海トラフ巨大地震の震度マップを投影したものである。直径6m・縮尺約6000分の1の高解像度空中写真は、大型ルーペで見ると建物1棟1棟が識別でき、自宅周辺のハザードや地域の特性を虫の目で観察できる。吹き抜けを通して2階から全体像を見れば、鳥の目で災害の規模感を俯瞰することができる。さらに、図中の楕円軌道は名古屋中心部で高層建物が共振を起こした場合のシミュレーション結果であり、片振幅1m以上の長周期の揺れを、マーカーの動きとして実寸で実感することができる。このように、虫の目・鳥の目を行き来しミクロとマクロの両スケールで地域をとらえるとともに、現象を実際のスケールで感じることによって、巨大災害の全体像から具体像までを一つの事象として理解できる。

写真2はマルチプラットフォームで動作するGISアプリケーションの画面である。左側に明治時代の旧版地図が、右側に現代の地図とハザードマップが同じ座標で表示されている。地図上のアイコンをクリックすると、該当地域の過去の災害や過去の土地利用の様子を、写真や図会などの歴史資料で閲覧できる。巨大災害の発生間隔は人間の時間感覚よりも長いため、「いつかは起きる」ことが「我が身に起きる」こととととらえにくい。その点を補うために地域の今と昔、そして将来を連続的にとらえる「時代感」の獲得が重要となる。

写真3は開発中のスマートフォンアプリケーションの画面である。スマートフォンGPSの緯度経度情報と、利用者が入力する建物階数・構造種別の情報を基に、応答計算を行って室内の揺れの様子を3Dシミュレーションとして表示するものである。一人ひとりで異なる条件を反映した、「自分が経験する可能性のある揺れ」を再現することで、結果を「我が事」ととらえて受け止めることができるようになる。

以上、3つの事例を用いて情報可視化による備え推進のための技術を示した。収集と加工の一手間を加えることで、既存の情報が持つ説明力を大きく向上させることができると考えている。

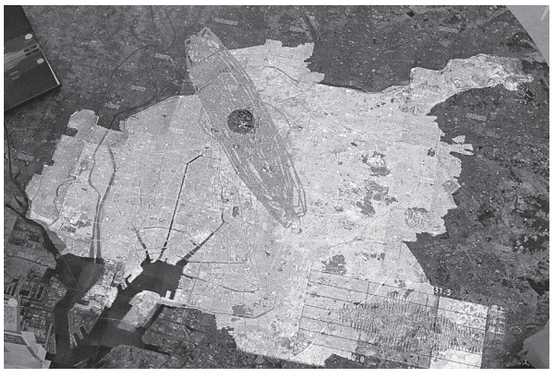
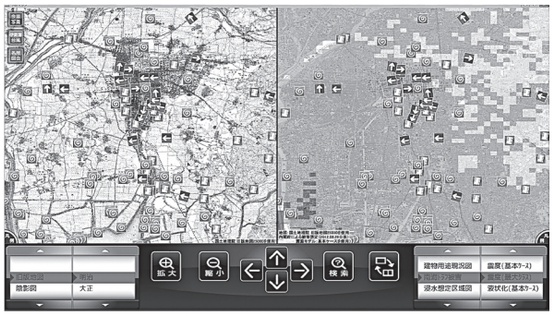


写真1：スケール感を得るための床面空中写真とプロジェクションマッピング


拡大
縮小
検索
建物用途現況図
震度(基本ケース)
浸水想定区域図
液状化(基本ケース)
地図
明治
航空写真
現在
地図
航空写真
現在
航空写真
現在
地図
航空写真
現在
地図
航空写真
現在
地図

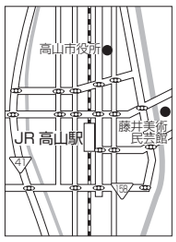
保存情報　第162回　JIA愛知保存研究会

データ発掘（お気に入りの歴史的環境調査）　JR高山駅

外観（2014年）

改札口（2014年）

昭和9年の外観（駅構内に掲示）



■発掘者コメント

高山駅は昭和9（1934）年10月25日、高山本線開通に合わせて建設され、以来80年にわたって飛騨の玄関口として多くの人々を迎え入れてきましたが、惜しまれつつも2015年2月に取り壊されました。その駅舎は一見、鉄筋コンクリート造にも見える外観ですが、木造大壁造りで県内最大の木造駅舎でした。高山は私が設計業務を始めた13年前から毎年20～30回通い続け、常にこの駅舎に迎えられてきました。改札は最後まで駅員さんによるもぎりで、毎回挨拶を交わして出入りしたものです。また、厳寒期には高天井の広々とした待合に様々な人々が集い、暖かな雰囲気にあふれていました。隣り合わせた国際色豊かな観光客同士が語らっていたり、近所のご老人が足休めに休憩していたり、電車で下校する学生が協力し合って宿題をしていたり…。そんな、人の顔がよく見える駅舎であった印象ですが、新駅舎は内藤廣氏の設計により2016年秋の完成を目指しているそうです。

ところで、内藤さんは私が最も敬愛する建築家。愛着のある駅舎の解体はとても残念でしたが、設計が内藤さんであれば、新しい高山駅の歴史を紡ぐにふさわしい新駅舎となるに違いないと期待していますし、その空間を体験できる日が待ち遠しい限りです。しかし、建て替えには強い反対の意見もあり、解体まで市民有志の組織が発足して意見交換会の主催や、署名活動などが行われました。以下、主宰者のことば「新しい高山駅舎は、神奈川県横浜市の内藤廣さんという方が設計してくださるそうで、有名な建築家らしいが、それを知って喜ぶ人が地元にどれほどいるのか」…根深い課題です。

所在地：岐阜県高山市昭和町1-22-2
高山駅周辺土地区画整理事業の詳細は
基盤整備部　駅周辺整備課
TEL 0577-35-3180

中澤賢一｜堀内建築研究所

データ発掘（お気に入りの歴史的環境調査）　後藤邸

東海道側外観

表坪庭　正面6帖

左・上｜割竹の化粧軒裏・巾木換気口　下｜延焼防止外壁軒裏（現在鉄板で覆う）

■発掘者のコメント

後藤邸は見れば見るほど「魅力」を秘めた味わい深い住宅である。匠のきめ細かな設計、技術、そして心を込めた作品であると感じる。

旧東海道に面しているが、商家ではなく、井桁屋・服部家六代目当主孫兵衛が、粋な叔母の隠居のために明治末期に建てたと伝わる住まいである。1949（昭和24）年住み継いだ後藤家の先代善三氏、当代寅二郎氏が建物を大切に使ってきたおかげで一部を除き、表庭も含め原形をほぼ保っている。静かで控えめな佇まいの建物は大別して三つの魅力を持っている。

第一に建物は住まいの主（あるじ）にふさわしくつくられている。茶室が計三つ（茶室一つと織部床を持つ次の間、六畳間）あり、水屋が通路と納戸も兼ねて、これらの茶室を裏で支えている。ここに尾張久田流家元の指導を受けた叔母の交際の広さと粋な生活がうかがえるのである。

第二に機能をふまえながら、数寄屋風意匠で統一されたデザインの巧みさである。主屋は使いやすい動線を持ち、漆喰の外壁や軒裏で延焼防止を図ると共に、低い茶室周りは化粧軒裏、床下換気口共割竹でデザインしている。繊細で美しい建具、竹や木の扱い、視線や採光への配慮など枚挙に暇（いとま）がない。

第三は匠の数々の素晴らしい工夫と実に良い仕事がされていることである。下地窓、欄間、建具の組子など、恐らく井桁屋と同じ職人の手によるものであろう。

主屋と「から廊下」で繋がる昔の雪隠には便器（呉須）がない。大便器は明治村に展示され、小便器は近年親戚の家で発見された。これらもいつかは元に戻り、保存・活用され、建物が末永く愛されることを願っている。

所 在 地：名古屋市緑区有松3011
交　　通：名鉄本線　有松駅より徒歩６分
建 築 年：明治末期（推定）
構造規模：木造ツシ２階建て、瓦葺き
※催事のとき以外は原則非公開

三井富雄｜モモアーキテクツ

05_アーキテクト.indd　20　15.4.20　4:34:57 PM

予算や建築家制度改革の進捗など報告多し

本部理事・東海支部長　石田　壽

第224回理事会は、「全国支部長会議in金沢」から1日おいての2月18日、出席者の多くに疲れが残っている中で開催されました。審議事項は多くはないのですが、報告事項に長く時間がかかってしまいました。報告事項の協議も重要ですが、もっと基本政策諮問会議答申などについての議論が必要と思います。

【審議事項】

1. 入退会承認の件（浅尾事務局次長）

新規入会希望：正会員8名、準会員；ジュニア7名、学生1名、協力会員；法人2名、個人1名、退会希望：正会員5名、ジュニア1名、法人協力5名、資格停止希望：正会員1名。承認

2. 委員会委員承認の件（筒井専務理事）

①教育・表彰委員会の委員　新委員就任：鰺坂徹（九州）、小林正美（関東）。承認　②建築家資格制度委員会の委員承認　新委員就任：鮎川透（九州）。承認

3. JIAまちづくり会議委員承認の件（連理事）

新委員就任：浦 淳（北陸）、荒木公樹（近畿）、森下修（九州）前回7名の委員が承認され、新たに3名の委員を追加。承認

4. 名誉会員の選考に関する規定改正について

（上浪総務委員会委員長）

文言の修正および運用しやすくしたとの説明があり、協議の上第6条の選考基準の順を定款にならい並べ替えることとし、承認。名誉会員とフェロー会員の違いについて説明できるようにとの意見が出た。

5.「JIA事業活動助成」採択について（赤羽公益事業委員会委員長）

補助希望事業は9事業で、審査の上4事業を採択。2014年度：1事業（岡山地域会）10万円、2015年度：3事業（香川地域会、JIA保存再生会議、福島地域会）計100万円。承認。洩れた中にも優れた事業があり、申請内容が説明不足であることで、修正し再申請は可能。

【報告事項】

1. 総務委員会報告

（準会員・協力会員の会費および本部経費について、フェロー会員選考運営マニュアルについて）（上浪総務委員会委員長）

準会員・協力会員の入会金・会費が定まってなく同制度をすでに導入または来年度から導入の地域会は、6月の総会に諮るので3月末までに報告のこと。2014年度の準会員（シニア・専門）の会費などの支部への支給は3月末。会員番号は入会年順に付け、正会員・準会員等の区分はなく、会員証に正・準・協力の記載がある。

2. 会員増強進捗状況報告（道家フェローシップ委員会委員長）

フェロー会員の処遇および寄付の扱いの報告。

3. 国際交流委員会報告（岩村国際交流委員会委員長）

建築および都市計画の国際設計競技のための「UIAガイド」の説明。

4. 全国会議委員委嘱質問書について

（岡部・庫川JIA災害対策会議世話人、中田氏）

前回の理事会にてJIA災害対策会議の委員候補者名簿の理事会提出が見送られたことで、本部災害対策委員会より質問書が出され、3名が理事会に出席し意見を述べる。本部（会長・副会長会議）と委員会の主張が食い違う。3氏が退席後協議を行う。委員会は関東甲信越支部の災害対策委員会との連携がなく、10年来委員長・委員の交代もない状態で、全国会議としては認めがたい。年度末で委員会を解散し、新年度にJIA災害対策会議を立ち上げたいとのこと。

5. 2014年度決算見込みについて（筒井専務理事）

会員減（シニアへの移行含む）で会費収入は予算より900万円減。一方で公益事業活動費、コンピューター管理などの大口支出減に加え、きめ細かな費用圧縮の結果、予算に比し913万円の支出削減となり、当期収支差額は500万円程度の黒字の見込み。

6. 2015年度予算（案）について（筒井専務理事）

正会員純減100名（2.5％減）で計上。事業収入・支出などは前年並みとするも、人件費で退職金1名分計上（積立金がなく全額通常支出）。毎年会員が約2％減となっており、5～10年先のJIAがどうなるのか、諮問会議などで検討する必要がある。

7.「JIA25年賞」改定について（大谷JIA25年賞タスクフォース主査）

「JIA25年顕彰」を見直し、支部が担う「JIA25年登録」と本部が行う「JIA25年賞」の2本立てとしたい。

8. JIA建築家大会2016開催について

2017年度四国支部はほぼ決定、2016年度はいまだ決まらず検討継続。東海支部は2018年度か？そろそろ考える時期。

9. 活動および業務執行状況報告（筒井専務理事）

①公共建築発注方式の多様化への対応（公共建築設計懇談会など）報告

時間がなく、重要な課題でもあり今後も継続協議する。

②改正建築士法の普及活動に関する報告

改正建築士法の施行にあたり「業務報酬基準に準拠した契約の締結の徹底に関する要望」を3会で内閣総理大臣宛に提出。

③建築家資格制度改革の進捗状況報告

大澤委員長より支部会員集会の状況について、基本的には賛成だが性急過ぎる、周知に時間を、との意見多しとの報告。更新料による会費アップは2,000円程度、CPD単位取得は12単位／年を考えているとのこと。これを機に退会もしくはシニア会員へ移行などの急激な会員減が心配。丁寧な対応が必要で、総会で方針を決めても、移行期間（2～3年）を設けてはどうかとの意見。

④災害時における住家の被害認定に関する協定（和歌山県）について

JIAと美浜・印南両町が「災害時の被災建物の応急活動等に関する協定書」を締結。

⑤横浜市新市庁舎建設計画に関する要望書提出について

（神奈川地域会）

計画の理念となるガイドライン、DBにおける事業者（設計、施工者）選定の評価軸などを提言。

05_アーキテクト.indd 21　15.4.20 4:34:57 PM

東海支部役員会報告

今回は持出役員会で、会議に先立ち沼津の御用邸を見学しました。シンプルな構成と材料の厳選がうかがわれ清々しい建物でした。食事も海の幸を満喫致しました。静岡地域会の皆様ありがとうございました。

いろいろと検討すべき課題はありますが、正会員ルートと支部財政は足元の課題です。皆様のお考えをご教示いただき、さらに活発な議論をお願いします。

奥野美樹｜奥野建築事務所

日　時：2015年2月27日（金）14：20～16：20
場　所：プラザヴェルデ406小会議室(沼津駅北口)
出席者：支部長、理事、幹事10名、監査2名、オブザーバー 4名、静岡地域会会員数名

1.支部長挨拶：静岡地域会の皆様へ、本日の持出役員会の設営ありがとうございます。（石田）

2．報告事項

（1）本部報告

①第224回理事会（石田）
※P21「理事会レポート」参照

②フェローシップ委員会（2/13）
・新取り組み体制：副委員長を2人選定し、新WGを創設し業務分担する。
・フェローシップ会員選考マニュアル：旧法人時の終身正会員の資格基準を参考としない。
・他：寄付の当面の目的、枠組み、募集対象、顕彰の検討、バッジ作成の検討、処遇の検討

③本部広報委員会（2/17）（奥野）
・「正会員ルート」広報計画：ご意見箱設置（HPにて）、アンケート実施、対外的な広報

④CPD評議会（1/28・2/25）（塚本）
・4月から提供される「（仮称）社員データ提供サービス」の説明

（2）支部報告

①総務委員会（見寺）
・交渉により家賃減額可能となる。更新は期間10年、途中解約可。（半年前の通知、相談）
・支部、愛知地域会両者での借上のため、減額金の割り振りは考察が必要。
・家賃のほか、支部事業の見直し、会員制度変更の影響を含めて考察していく。
・返答が3/20まで、更新を4月からとしたい為、審議とする。（下記）

②正会員退会届の確認（久保田）
太田新之介（静岡）（現在慰留中）、片山繁行（愛知）

［審議事項］

①正会員入会届（久保田）
・高木一滋（静岡）、近藤万紀子（愛知）、村上貴彦（愛知）　承認

②日刊建設通信新聞 65周年特集号広告掲載について（久保田）
・内容、名称の使用方法を再確認の上、問題なければ支部長に一任。

③事務局家賃減額につき、契約更新する件（久保田）　承認

［協議事項］

①東海支部大会2015実行委員会（2/23）（谷村）※報告事項として
・TV塔を会場予定。3/4会場視察予定。
・『保存情報3』（愛知地域会出版）を大会で買い上げて出席者に配布する予定。

②名誉会員推薦について（久保田）
・支部より１名程推薦する方向とする。3/20までに各地域会で推薦者を検討する。
・フェローと名誉会員との違い、名誉会員選考規定第6条選考基準に注意。（鳥居）

③「ARCHITECT」発刊について（石田）
・8ページ減で50万/年程度削減可能。支部財政立直策の一つとして検討していく。

［その他］

①地域会総会日程（久保田）
支部5/8、静岡4/27、岐阜4/22、三重4/18、愛知5/8

②地域会支部会計監査日程（久保田）
支部4/15、静岡4/7、三重4/10、愛知・岐阜未定

③支部総会議案書について（久保田）
原稿締切3/6

④本部理事推薦について（石田）
鈴木利明氏（愛知）を本部へ推薦済み。

⑤「ARCHITECT」法人協力会広告掲載に関する企業ロゴ使用について（久保田）
・協賛者よりロゴ使用時の誓約書発行依頼あり。リスク回避などを踏まえ今後ひな形を作る。

［監査意見］

・家賃交渉は良かった。今後も活発な議論を続けてほしい。（山田）
・家賃交渉は良かった。（中村）

［オブザーバー意見］

・建築関連他会は県単位の会であるがJIAは全国会であり、災害時に他県からの応援ができることは強みである。その強みを生かして行政との連携等を進めるとよいと思う。

05_アーキテクト.indd 22　15.4.20 4:34:57 PM

東海とっておきガイド㊼ | 三重編 |

木下誠一（三重短期大学）

阿漕の町並み

津市中心部の南に阿漕の町並みがある。古くは津城下の一部として伊勢街道沿いに家々が建ち並んだそうだが、今でも伝統的なつくりの町家が幾つも残る。切妻平入で、格子や袖壁、軒先には幕板を設けたのが特徴で、それらが連なる町並みは往時をしのばせる。

この町並みは子どもの頃から見慣れたものだが、改めてその価値に気付かされたのは、大学生の頃に旧街道筋の景観調査をしてからである。それから四半世紀が過ぎ、市内の旧街道筋では建て替えや道路拡幅などでその面影を失うところが多い中、ここは、ゆっくりと時を刻み、生活の中に息づいている。東海道関宿をはじめとした県内各地に残る歴史的町並みと比べれば、文化財的価値や知名度こそ劣るかもしれないが、一市民として大切にしたいと思える町並みである。

所在地：津市阿漕町津興

平治煎餅

この町並みから東方に10分ほど歩くと伊勢湾の阿漕浦がある。時代劇などのセリフに出てくる「あこぎな奴」の、「あこぎ」の語源となった伝説の地である。昔、神宮御用の禁漁区だったにもかかわらず、平治という親孝行の漁夫が病気の母親に食べさせるためにたびたび密漁をして、ついに浜に置き忘れた笠が証拠になって捕まり、簀巻きにされ海に沈められたという悲しい伝説である。

この伝説にちなんでつくられた和菓子が「平治煎餅」である。平治が忘れた笠をかたどって作られたもので、津市民なら誰もが知っている、素朴で懐かしさを覚える銘菓である。子どもの頃から慣れ親しんだ味だが、阿漕の町並みと同様に、時を重ねるにつれ、過去のさまざまな物語や記憶が重なり、いっそう味わい深く感じられる。歳のせいかもしれないが、いつも変わらずそこにあるものはやっぱりいい。

平治煎餅本店：三重県津市大門20-15　TEL 059-225-3212

地域会だより

＜静岡＞

3/12　三会協同要望書の訪問提出（浜松市役所）
3/17　静岡県住宅振興協議会第3回企画委員（兼文化賞実行委員）会に出席
3/17　三会協同要望書の訪問提出（静岡県庁・静岡市役所）
3/19　3月定例役員会
4/2　4月臨時役員会
4/7　監査
4/16　4月定例役員会
4/27　通常総会　建築家講演会「手作りと工業化の狭間で建築を考える」
　講師：建築家 泉幸甫氏

＜愛知＞

3/12　住宅研究会
3/13　JIA愛知美術サロン
3/17　ブリテン＋支部・会報委員会
3/18　愛知・会員委員会＋法人協力会役員会
3/24　支部大会実行委員会第6回
3/26　住宅研究会 スライドトークセッション　建築家の意伝子
3/30　総務委員会
4/3　役員会+CPD講習会
4/6　建築八団体連絡会議）
4/9　支部大会実行委員会 第7回
4/13　（愛知県建築士事務所協会　建築賞選考審査会）
4/14　監査　総務委員会
4/16　住宅研究会
4/17　役員会
4/20　（高蔵寺ニュータウン　コンペ審査会）
4/24　（積算協会中部支部総会懇親会）
4/28　総務委員会

＜岐阜＞

3/10　視察研修旅行　場所：静岡県御前崎市　中部電力浜岡原子力館・浜岡原子力発電所　参加者：15名（正会員6名と法人会員9名）
　内容：原子力発電の概要説明、構内説明見学（見学時間13:00～16:00）（※詳細はP10に掲載）
3/13～18　「第14回ぎふ建築・生活・芸術系学生・生徒優秀作品展」（JIA岐阜地域会共催）　場所：じゅうろくてつめいプラザ
　3/14：講演会：「Computation+:不確かさと計算、又は同語反復について/都市へ」　講師：木内俊克氏（木内俊克建築計画事務所）
　合同講評会　審査員2名参加（JIA）
3/16　第8回 役員会
　場所：ハートスクエアG　小研修室2　総会前準備について
4/22　通常総会・懇親会　17:00～20:00
　場所：ホテルグランヴェール岐山

＜三重＞

3/31　第6回役員会、第8回例会
4/10　監査・第1回役員会
4/18　通常総会

05_アーキテクト.indd 23　15.4.20 4:34:58 PM

法人協力会通信⑰
＜三重＞

ものづくりと環境への想い

小森　聡｜TOTO㈱津営業所 所長

TOTOのものづくりは、ほぼ100年前にさかのぼります。1912年、日本にまだ下水道設備も衛生思想もない時代、創立者の大倉和親は欧米視察をした際、陶器製トイレの清潔さに感銘を受け「日本人にも清潔な住生活空間を提供したい」との思いから衛生陶器の国産化に取り組み、量産化に成功。1917年に東洋陶器株式会社（現TOTO株式会社）を創立しました。常に「良品の供給」「お客様の満足」を志し、国産初の衛生機器から始まったものづくりは、その後バス、洗面、キッチンなど水まわり全体に広がっています。これからも創立者の大倉和親の願いと信念を引き継ぎ、よりよい商品を提供していきます。

TOTOは創立当初から事業を通しさまざまな社会課題を解決してきました。水洗便器の開発と普及は人々の生活を変え、当時の「衛生」という社会課題を解決する重大な役割を果たしました。そして21世紀の現在、TOTOグループは世界共通の課題である環境問題を、事業を通し解決する課題として明確に位置付けているのです。

TOTOの商品は「世界中のお客様」に「まいにち」使っていただく生活に密着したものです。だからこそ、商品使用時の節水、省エネの積み重ねは地球環境への影響を大きく左右します。「世界中のお客様」に環境配慮商品を使っていただくことで、お客様の「まいにち」の暮らしから節水、省エネ、CO2排出量削減といった地球環境への貢献が生まれます。TOTOでは創業100周年にあたる2017年に向け、以下の6つの社会課題に対して取り組んでいます。「水を大切に」「資源を大切に」「生物多様性を守る」「温暖化を防ぐ」「地球環境を汚さない」「地球社会のために」。

左｜1912年：製陶研究所設立時の写真
右｜1914年：国産初の衛生陶器製 腰掛式水洗便器完成

JIAの活動はすべての会員様との情報交換の場でもあり、これからもJIA三重法人協力会員として皆様と連携し、会の発展に貢献していきたいと考えております。

●TOTO株式会社 津営業所
〒514-0801 三重県津市船頭町津興3424
TEL 0120-43-1010 FAX 059-221-0205

編集後記

●3月号より若手のプロポーザル関係の特集記事が始まりました。今月号には高橋敏郎先生と川口亜稀子さんによる簡易プロポーザル「公民館プロジェクト」の記事が掲載されています。このような動きが広がっていき豊かな建築が少しでも多くなることで、街と人と建築の関係も変化してくるのではないでしょうか。今の時代に求められている建築家像というのは、従来の古い建築家像に基づいた建築家職能理論ではなく、市民と共に歩む建築家像なのではないかと感じています。建築家という言葉は、世の中でいろいろな使われ方をしています。その建築家という言葉を狭い範囲でいくら定義づけしても、世の中で共通認識されなければ普遍的な言葉にはならないような気がしています。今後、建築家資格制度の中でもさまざまな議論がされていくこととも思われますが…。プロポーザルも含めて、今の時代としてJIAとしてできることを模索していく時期なのではないかと感じています。

（牧ヒデアキ）

●編集後記のご依頼を受け、福島で計画している知的障がい者の福祉施設の事務所検査の合間を縫って、この原稿を書いています。さまざまな方からの寄稿を拝読して、東海地方の建築家のネットワークが確実に育まれてきているなぁと感銘を受けました。私が名古屋に事務所をかまえた十数年前、知り合いの方も少なく、建築家相互の交流をフランクに行える場がほしいと考え、名古屋建築会議（NAC）や「いくらきかく」（岐阜）を、複数の建築家、研究者の方たちと立ち上げ、さまざまなイベントや交流の場を共有してきました。その当時に学生としてその活動に参加してくれていた人たちが、今や建築家として『ARCHITECT』の企画・編集に携わられています。寄稿の内容は多岐にわたり、プロポーザルの是非、建築家の職能、建築の紹介など、時代性と地域性を反映した複数の視点のリアリティに共感しました。改めて、中央の建築家を追いかける時代から、地方の建築家が情報を発信する時代に移行してきているのだと実感しました。

（宇野享）

ARCHITECT
第320号
発　行　日　2015.5.1（毎月1回発行）
定　　価　380円（税込み）
発行責任者　石田　壽
編集責任者　牧ヒデアキ
編　　集　東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT編集部
名古屋市東区泉1-1-31 吉泉ビル703
TEL（052）971-7479　FAX 951-3130
発　行　所　（公社）日本建築家協会東海支部
名古屋市中区栄4-3-26　昭和ビル
TEL（052）263-4636　FAX 251-8495
E-Mail：shibu@jia-tokai.org
http://www.jia-tokai.org/

05_アーキテクト.indd 24　15.4.20 4:34:59 PM